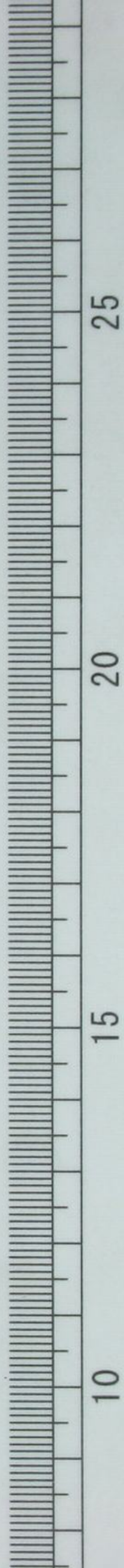


沼尻絰一郎編輯

西南太平記

七号

上



10

15

20

25

A434
11

沼尻絰一郎編輯全二冊

西南太平洋記

東京 萬笈閣發兌

四月二十九日行在所あんざいみかいて各官廳くわんていへ尤の
通り布達おろれあり

行在所あんざい第八號だいを以て戰時せん船舶出入せんぶつしゅつにゅう并な密賣取締心得相達ひみつばいしゅじふしん置候所おきまう右みぎの詮議せんぎ之次のつぎ第有之一般施行だいいういちぱんしんじゆ不及おと尤精々なほせいせい注意致ちゆいし
事實じじゆ疑敷見認ぎふきけんじゆんる船舶せんぶつに限りかぎ該規則かいかんきに照あ準取締可致しゆんしゅじふしん此音更こゝろに相達候事あひまうし

明治十年五月三日

西南太平洋記

沼尻絰一郎

48-7794

西南大平巳

野津大佐



西南大平巳

總督官





山川大佐

正正南度大平言



西南太平記七編卷之上

東京 沼尻桂一郎編輯

第十三回

島津兄弟父の代理より上京す
并賊將兒玉實美討死

征討の命ありてより已み模様と按むるに熊本福
岡中津の三所へ夫々兵を配分せらるる一ヶ地方の
不平士族薩徒の事を知りて騒ぎ出るも大義名分
と誤る可き由る士民の拳動に注しその廳に臨

む吏と許さば既も同縣の過激黨の百五十名をど
官より直も手配あり見ふ間も捕縛さるあり
又三月二十九日木留口の戦ひの暫時砲声聞ひ
火焰熾んたりしが木留の此所彼處より戦ひあ
りたれど勝敗もあらず翌三十日未だ夜もあけ
ざるふ山鹿の官軍の大拳にて賊軍と三面より攻
撃し砲火とりりし賊の諸營も火を放ちたを
暗夜も白晝の如くその砲声天地も轟き萬雷の

落るも斯やとあやまる時は高津原なる賊軍
の殊も官軍の為めよりち脳まされ防戦をること
能もすして崩れ立ちたり此の日官軍の厚倉口よ
り三嶽も攻登りたをども山の頂上より賊軍の撃
てども衝けども少も屈する色なく必死より
りて賊徒固守されを官軍も詮方なく出の所を
退きたを木留口の先づ進撃と見合されたり
蓋し山鹿口の官軍の鳥の巢と攻ん為め古賀村

まで進むと、いづれども其場所廣くして守りがとく
隈府の方へ進み、一手も余り戦ひの利少く、
をむとてまづ引揚げられたまふと同日の賊軍の死
傷多く、官軍の死傷の少く、且つ此の日賊の
刀剣類を分捕りたりと云ふ、又八代口へ黒田参軍
川路少将、山田少将ありて、日夜攻撃の策を議せ
らる、昨今益々進撃の模様ありといふ

熊本縣下第七大区八小区高瀬町去月二十

七日賊徒追討の節、兵火は罹家産蕩盡目
下凍餒に迫り候、のへ差し向き、御救助米下
賜り候、條明十三日より、羽根木村、田會所、
おいと相渡し候、條請取人可罷出候、段相達
候事

熊本縣令心得内務權大書記官

明治十年三月十三日 石井省一郎

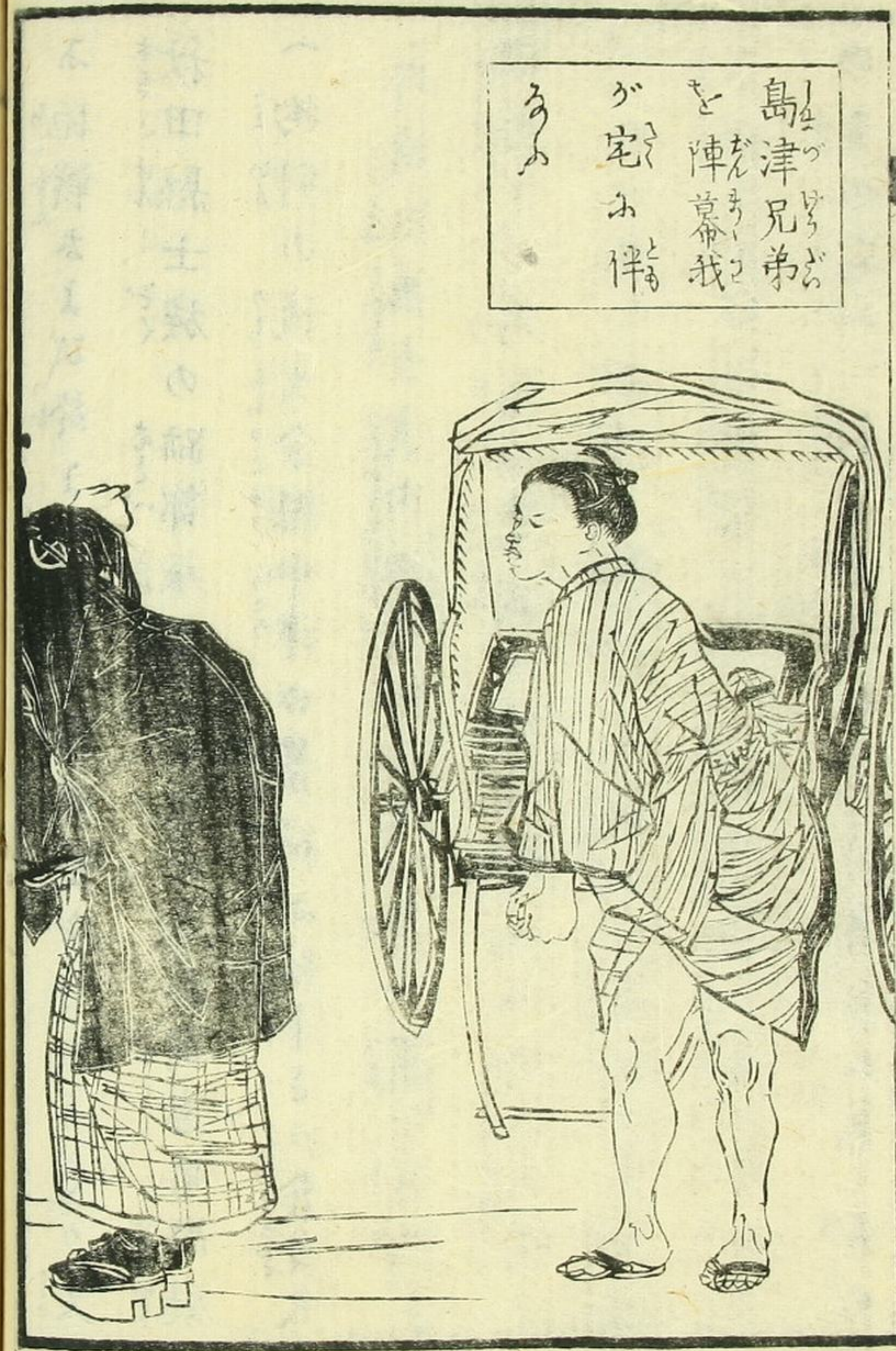
同所、みい陸軍の假病院七ヶ所あり、又戦死の
のの埋葬地二ヶ所ありといふ

儲も大分縣下豊後の國宇佐郡辺の百姓が蜂起
 一と同縣下赤尾村と始り區戸長の家その他
 豪家と打ちこり一乱暴と火をかけまると中津の士
 族が八十人むりり空砲を發し暴徒の総人數凡そ
 二萬人をかりゆゑ官軍玉込と打ちこり暴徒の漸
 やく散々となりむの内六十人ちと戦ひ出で此
 暴徒の中津の士族の中夫々彼の黨も豊前の立
 石へ止まり一手の豊後府内へ迫り縣の官員と互

小砲戦および終に賊徒を追ひ退ぞけたりと又
 秋田縣士族の跡部辰蔵へ十六七人の同志皆縣廳
 へ拘引の後大分縣中津の暴徒を組一と戸倉貞太
 郎渡辺兼吉武内源太の三人の我が罪を自訴し
 同縣下で蜂起の農民が宇佐郡で六人下毛郡よ
 て百六十人捕縛し就しとり熊本の戦地より大坂
 今橋二丁目の商家より三好陸軍少将へ出入り
 の者の宅へ一封を送られしその書翰の寫し左の



島津兄弟
を陣幕我
が宅お伴
るふ



如

拙者義無事不軍務罷在り候條故意有之
度候此節浪花表の桃花爛熳十分の好風景
みらんと遠察り候且つ南陽の藪の見
世りの芳く興行有之より其内帰坂萬々

開封し見えを戦争のことなどい少しのみり
し由主人の只管に賞歎して多くの兵を引率
される大将だけ有つてその度量のひろき實に

斯く有りはりのよて軍配の程もさこそ推量らる
といふより将に将たりと云ふべき一美談でありなり
備も島津珍彦同忠欽の両公の大坂梅田の停車
場へ着せられ一時東京角力より當時大坂の頭
取る陣幕久五郎が多人數弟子共を引連ま
同所まで出迎ひとして出で人力車をゆつてま
江戸堀上通り一丁目の陣幕の宅へ着せられ夫
より西京へ赴くとせしに大坂より鹿兒島へ出

張の三井銀行支店へ縣廳よりの沙汰みて今度
 云々の事より出兵するやも測りがとけさへ其
 店より有合ふ金とその俵置も無用心なきに縣廳
 みあがけかくべし然らむ十分に保護すべしと
 支取入のふどろきて有金五十万圓と縣廳へ差
 出せしに縣官の直ちふ右の金圓と西郷ふ贈りしと
 の説あり又西郷の日本通用の紙幣と造り出さ
 れとの説もありとりふ斯く戦地よりありし肥後助

左工門の鹿兒島中指折の剛の者の聞えふく戊
 辰の役も従ひ其の後近衛兵の砲隊士官より
 一説此の度も賊中一方の隊長とあり居りしと
 一説も同人の舎弟肥後氏の官軍一方の攻
 口ありて此のふと東京の従弟に送りし書
 中に現一家兄と敵中に見たりと私へ未だ
 その徘徊するを見ざりも若し其の姿を見
 かけらば必死と極め馳入りその首を打ち落

西序三言
一決して他人の手よりかけ申す間トく御安
心下されたく云々とあり斯くの如く父子兄弟
戦場より刃と交トへるの數ふらゝ違ふ一を
以て國家より盡一ハ叛賊より黨す固より己
むと得ざるよ出るとり人とも最も不幸と云
ふべきの事

四月一日の神戸へ向けて出帆ハ警視局 檻倉掛り
の醫員中山渡邊の両氏並に第三大區警視病

院の医員多田氏を巡查と俱に戦地へ發向せら
れたり去る三月二十九日の進撃は賊徒ハ狼狽へ
廻り大砲小銃ともうち捨て逃げ走りたれど如何の
度又や山田少将より出せ一大隊の大斥候ハ一旦引
揚げらまゝ賊ハ人吉の方へ入込む様子ありふぞ
官軍ハ夫々手配りありて翌三十日の兼て謀一合
せし変るねを連日の戦ひも疲れしとや流石標悍
無前の薩兵も勇氣たゆまて見ゆるよ依り是ハ

西日本大正十一年

何更ぞとその手の賊将元陸軍少佐たり一児玉
實義の頻りよ兵士に号令して防戦せしめ自ら
ら大刀と揮つて官軍の群がる中へ切て入り當
ると幸ひと暫時の挑を戦ひて目覚しき有さうな
たのりい官軍の之を物ともせむと夫れ討ち首よ
と攻め立けるよと遂に其の場は戦死せりと是
よりいと残賊の踏止る者もよく散々よなると
敗走せり此の日賊軍の死傷も殊に多く官軍勝

利みて戦ひを収むるにいつり賊の捨置きとる
大砲小銃を分捕りせり翌三十一日官軍松橋をさ
いと進撃す頗ぶる苦戦して同所をおち抜き
直よ宇土へと進撃せらるるの計策ありとを蓋
し薩兵常ふ險阻とも厭はず押し通り敵の横合
より出ると其きが由るふ官兵殆んど苦戦する
よと再び又胸壁を築くこと能はざる地の如き
の僅りよ一人身と容るの穴と掘りその凹一所よ

西日本大正十一年

七編上



人吉嶺不
 賊將児玉
 戦死す



り狙撃めづりまると最もつとも自在じざいありと又去またる二日ふたひの吉次きちじ
 坂さかの戦いくさひは官軍くわんぐん一手ひとての山鹿やまがに向むかひ突つまて戦いくさの
 始はじめはより一ひとの江田陸軍少佐えだりくぐんせうさの一手ひとての賊軍ぞくぐんの背せ
 後あとを衝つんとり方畧ほうりやくを設たてけて進すすまれ一ひとの敵てきの疾はや
 くも吉次坂きちさかの切所きりどころを固かめ居ゐるところぞ案あんと相違さうわいを
 為なしたまはしり單ひとり擬議ぎぎするとのありべき彼の小
 賊ぞくと打ち拂たたくへど暗揮かづの下したより兵卒等へいそらが頻しばしばりよ
 進すすむ奮激突戦ふんげきつせんありと

説せつ云い三月二日さんがつににち朝あさより戦いくさひあり稍さう十二時じふにじと
 も思おもふころ吉次坂きちさかより攻寄せませ今いま一ひと奮發ふんぱつを
 せむ峠とがげまで至いたるとまるとき賊ぞくの中うちよて木
 曾義仲そぎちゆうが轍くわを踏ふめる者ものやありけん忽然きつぜんと
 して山上さんじやうより二疋ふたひきの大牛おほいしと追下おひかせ一ひとは此坂このさかの
 薬研やげんの如ごとく堀通ほりとほしたる道みちをを外ほかへ避さく
 べき事こともなかりず勇立ゆうたたる官軍くわんぐんも是こゝがたれ
 悩なやまさをて一時ひとときの甚まど狼狽ろうたいせ一ひとが兎角とくかくして

彼の牛が埋伏せしところを来りし仕留しとぞ
 借その晩よりりて兵卒等が熊手あく牛の
 肉を切り取りて焚火を炙りて喰し是れ為
 英氣を養ひ敵の馳走を遇たりと大勇
 氣もあさりたり

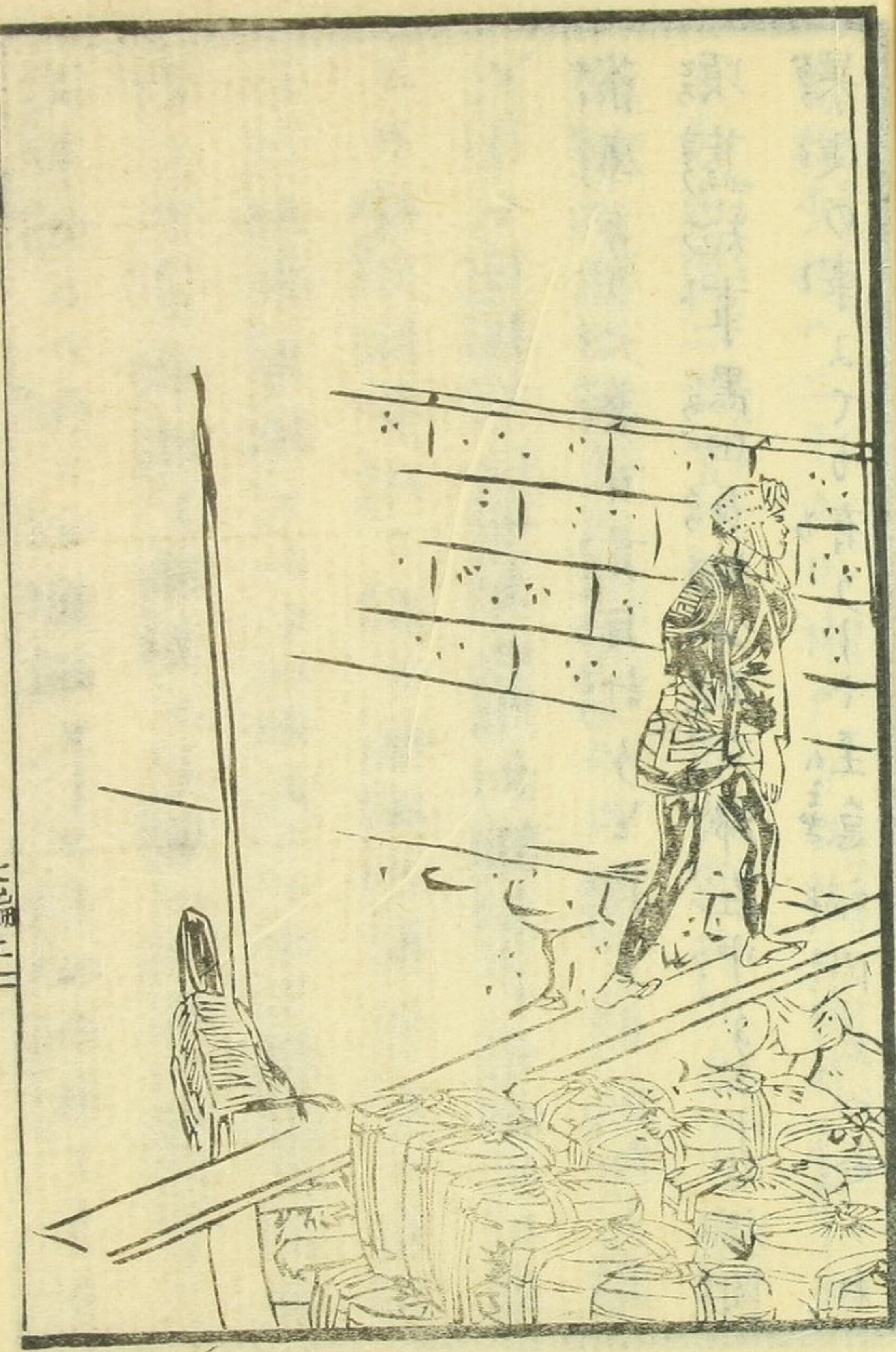
借も植木留の両口の官軍賊軍の両兵とも依然
 として對壘してありしが三月三十一日官軍の別
 隊の植木の東に當り小野山村に進撃したり蓋

官兵の接戦して短兵よく賊壘を抜くは多きを
 巡查隊も又兵士の内剛勇不屈よしてよく戦
 ひ功を奏するに近衛兵東京鎮臺あり又砲兵
 士官の中四十名位團と結び遊撃隊と稱し二
 手或ひは三手も別れ賊壘に進撃突戦する等
 就にも比類なく兩軍の耳目と驚ろすれど
 みる味方これが為り一層銳氣を増したるが
 惜しむべし此手のそのの重し先登まるるれ

在疵を蒙るの勘多かりむとまゝに 舊會津藩の
 内うちで有志あつしの人の内室うちむろより横山松女尾茂原鈴女
 その外ほか三四十人一小隊と組くむ二葉操ふたはなと續ついで
 の英婦えいふより戊辰年ごんねん間まの會津戦争あいつの傷者きやうしやの
 世話せわとして勝手かちても覚えおぼえて居ゐるゆゑに此この度たびも
 征討せいとうの從軍じゆんを願ねがひ出いたり追々おひにお願ねがひも
 ありつる中なかみ摂津せつのよ川邊か邊郡伊丹町大坂府下
 ありしが小西新古工門こにしんこくもんの方かた今いまのところよていい泉州いづみ

の飯野佐太郎いひのさたろうの左ひだりより出いる豪家ごうけあり集人しゆじん之これを
 呼よんで伊丹大盡いひだんたいじんといふ西南暴拳事件せなんぼうけんじけんに付つき征討御
 入費いりひは御加へ下くだされし再應願さいおうねがひと上げ金田六萬かねだろくまん
 田ゐと献けんたりと金田と献納けんなくしたいと備前びぜんの国見
 島郡岡山縣下味野村しまぐんおかみやまけんかみのむらの士族野崎武吉郎ししゆのざきむきちろうの戦地せんち從
 軍ぐんの兵卒へいそ差さし出いさんとして前まへより金千四かねちよと献けんたり
 と又高知縣下徳島の士族ししゆへ去さる二十七日同縣下
 第一大区五小区富田浦の瑞巖寺ずいがんじに集會しゆかいし征討せいとう

伊丹長者
の酒店繁
昌の躰ハ



從軍願ひの儀ニ付議論せし高知縣廳より
 翌二十八日早曉ニ徳島の支廳へ一片の飛報あり
 一と又廣島縣下にてい去る二十二日何者の所為
 ふや獲並精吾外二名が銃砲火薬賣買の免許
 と得て同縣下仁保島の内金輪島より所持する火
 薬庫より火薬百貫目計りと竊そ去りたる其
 頃舊知事黒田長知公西京滞在中より一が福岡
 暴徒の事とて有り一や至急福岡表へ赴かれ

曾我少将ハ二十九日神戸と出帆一同所へ向えれ
 一と山階二品宮ハ四月二日西京より東京へ来り
 園部侍従ハ西京より出張され同四日より一巡查五百
 名と西京へ出張し戦地へ追々繰り込とあり
 一と云ふ
 天皇陛下ハ三月三十一日午前八時の蒸氣車
 て大坂鎮臺へ臨幸あらせられ各隊の整列を
 天覧ありと云ふより鎮臺病院の疵傷人を御慰

勞あらしせらるたり又同月熊本縣令心得石井氏より區戸長への告諭もある由

備も賊將別府新助逸見十郎太の兩人鹿兒島

より歸り直よ兵と募り既にして四月一日より二日

に至るまづみ千五百人を率ゐ八代口にある官軍の

背後より進んで狭く撃つと賊兵は官軍の陣

へ近づきけり同日早朝より総勢を出水大口の兩道

より繰り出り一隊は官軍を撃つと退きしと諸軍

と勵まり桐野利秋は汗馬を鞭うつと真向に馳せ来

り官兵と指揮し野津少將は賊兵に入り乱れて戦

ふ中う桐野の官兵の大軍へ馳せ入り浅痕少々受け

らるしとり又熊本城は既小籠城以來四十日及

ぶとされども要害堅固の名城は將校以下のよく

防戦するがゆゑ今日猶依然として賊軍の重圍

中よりつりと茲に三月二十日附より熊本鎮臺谷少

將よりの報が四月四日西京へ達したりがその

畧みハ當地の戦ハ利あり昨今ハ砲戦の賊ハ僅
 ク八百餘又過ぎず只遠巻を為すの鎮臺ハ警備
 益々嚴重るも賊も犯す能ハ糧食ハ充分の貯
 へあり此の節の興廢ハ此の鎮臺ハあり賊も我ガ糧
 食の尽るを待つ様子又依て旅團の進撃を待其
 他の戦争田原坂ハありと間々砲声を聞く其の他
 の賊敗るを當地も従つて瓦解するらん海路
 より高橋へ向一聯隊を遣進撃ありたり彼地の

僅々の賊ありのを何分迅速ハ進入一早ハ果窟と
 屠らんとして要す又阿又根邊へも軍艦を廻し弾
 薬糧食の運送と断んと要すとありて現ハ下圖の
 如く稍もまよとバ賊侵入せんとする勢ハあるハ城中ハ
 ハ味方の勇氣を示さん為めハ頻りに城櫓にて絃
 と弾と鼓鳴すより近づき進めを遙ハ其絃歌の声
 を聞たりと豈勇まき更るらずや又四月一日筑後
 尾徳村ハ激戦ハ破られて筑前秋月ハ至りたる

を臺兵巡査隊小追撃一翌二日午後一呼うて
賊軍忽ち潰散す始トめ賊徒等秋月の士族の應
せんとな望そ一と豈圖らんや士族の應せり依
舊城を籠りたるが遂に一撃の下に敗きたり
とぞ

西南太平記七編卷之上 終

010190507683

